
髪結い～死神の物語～

Mix

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

髪結い～死神の物語～

【NZコード】

N7619C

【作者名】

MiX

【あらすじ】

人間の存在の力を糧としてこの世に存在する死神の悲しい物語。

プロローグ & 一話

プロローグ

純白の世界。

灰色の世界。

漆黒の世界。

私は、願いましょうこの二世界の存続を 。

一話～この世と異世の狭間～

此處は何処だ？

俺は何処にいる？

本当に何処なんだ

？

俺は、暗い闇の中にいた。何も聞こえない。何も見えない。

唯一、見えるのは自分の身体。自分の姿。

俺は、家で普通に寝ていただけだったのに。

俺の両手首には金属で造られた、大きな刃のようなものが突き刺さつていた。

痛くない、何の痛みも感じない。その先のほうには深紅の紐がくくりつけられている。

首は頸動脈を鋭利な刃物で切りつけたような大きな切り傷がついていた。

それも、左右両方とも。

そして、一番、誰が見ても「死んでるよ」と言われるくらい痛々しくそして気持ち悪い。

心臓を一突きした大きな大きな金属質の刃のようなもの。

それは、俺の血で深紅に染まっていた。

俺は怖くなつた、逃げ出したくなつた、こんな事になつたのは誰の

せいでもない。

きっと夢なんだ。夢だ、ゆめ……だ。

俺が気を失いかけたその時、声が聞こえた。綺麗な、色に例えれば真つ白な、綺麗な声。

「ねえ、起きて。眠つては駄目。戻れなくなるわ。」

少女だった、真つ黒なワンピースに真つ黒なローブを身に着けた、銀髪の少女だった。

年は、俺と同じくらい、長く綺麗な髪が印象的な少女。その少女の隣には、こちらもまた真つ黒なスースを着た、若い長身の男が立っていた。少女は、俺のほうを見つめている。

俺はなにか答えないと、と思い口を開いた。

「え……みは、だ……れ？」

少女は、一瞬優しい顔になると「ひい」といった。

「私は、髪結い。貴方の居た《この世》と異なる世界から来た者。」

彼女は、自分のことを【髪結い】といった。何のことだかわからぬ。異なる世界って何のことだらう。俺は、このまま眠つてしまつはすだつたのに、さつきの感覚はどこかへ消えてしまつたんだらうか。そして、また彼女は、話し始めた。

「ねえ？私の、＊＊＊にならない？また、生きてみたいでしょ？『《この世》』で。」

彼女が、なんと言つたのかうまく聞き取れなかつた。俺は、無意識のうちに首を縦に振つていたらしい。彼女は、一言「解かつたわ。」といつて姿を消した。

そして、俺は気を失つた。

プロローグ&一話（後書き）

この作品は結構お気に入りです^_^

学校登校と電波な髪結い

（学校と髪結い）

「ん……。」

目の前がぼんやりとしている。天井が見える、仰向けになっているのか。ここは、懐かしい香りがする。落ち着く。しばらく俺は、ぼうつとしてから、はつとして起き上がつた。そうだ、俺は何処か違う所にいたはずだ。真っ暗な漆黒の世界に……。俺は、両手首を確認した。結構、大きな傷跡があつた。首筋を触つてみた。傷がある。

胸の辺りに、手を置いてみた服の上からでもわかる。大きな傷あと。それから、辺りを見回した。ああ、ここは俺の部屋だ。高校の近くに借りたおんぼろアパートの一室。六畳ほどしかないが、自分的にはまだいい部屋だと思う。

そして俺は、日付けを確認するために携帯を探した。しばらくそちらを漁つていると

……あつた。大量に溜まつた洗濯物の中に埋もれていた。開くと、俺が記憶していた日付より五日ほど過ぎている。

ええと、今日は……水曜日。学校があるはずだ。来ている服は、学校の制服だしとりあえず行つてみるか。傷を誤魔化すために首には大きな絆創膏、手首には包帯を巻いてみた。少し違和感がある。今は、午前七時三十分。走れば五分で着くから十分間に合つ。俺は、教科書類を乱暴に鞄に詰めると玄関へ行つた。そこでまずびつくりしている。まず目に付いたのは、学級の手紙。三日前の日付だった。次は……と、こんな時間はない。俺は、ドアを開けて外に出る。ん? 下に誰かいる……。俺の部屋は上の階にある。よくよく見てみると、

学級委員長の白鳥姫歌と学級委員の蓮見架椅だつた。はい？学級委員たちが何のようですかね？？俺に？つか、俺に？

俺は、とりあえず下へ降りた。

「あーあの、えと……。」

「ん？何か用？」

わざと、そつけなく答えてみた。白鳥はちよつとびびつてゐみたいだ。

「おい！郁斗、一日も無断欠席つてどういうことだよ！！」

「ん？あ、かい。ちょっとな。おふくろが、危篤でさ……」

さあ、通るか！いやだめか。ま、しじうがねえか。ほんとのこといえねーし。

「うそつけ。サボりだろ！先公力ンカンに怒つてたぞ……！」

「あ…の。えと、若松くん。えつと。あ、えつと、あの…。」

白鳥は、マンガに書いた駄目キャラのような性格。いまの、時代でいつとまあ、萌えキャラだ。あれでよく学級委員長やつてられるよな。もちろん、俺は無視して学校へ急ぐ。遅刻する時間でもないけどたまにはいいだろ？氣がつくと、校門の前だつた。そんなに早く歩いてたのか俺。

「覚悟はできて？私の糧^{アリス}となる者？」

目の前に見たことのある銀髪が見えた、いや髪結いと名乗るあの不思議少女か。覚悟つて何だ？あ…そういうえば去り際なんか言ってたな…私のナント力にならないかつて確か。アリス？あれか、童話。メルヘン？頭、おかしいな、あいつ。

「何かいえないの！私の糧^{アリス}となる者！」

「おい…いつ俺がその、アリス？になるつて言つた。」

「もう契約済みよ？あんたが狭間を彷徨つてたから残りの命をこつちに引き止めてあげたんじゃない！お礼くらいつてよね！…」

「は？命？何言つてるかわかんねーよ…」

「だから…あんたは死ぬところだったの。こっちの世界で言つとそういう事なのよ！身体と魂の定着度がかなり薄くなつてたんだ

から！！」

「は？俺が死ぬところだった？」

馬鹿かこいつ。死ぬところだつたつて、俺生きてるじゃねーか。でも、なんか動きにくいし……このことなのか？契約つて……なんだよ。

「糧アリスとなる者、名前を聞いてなかつたわね……」

「あ？名前？……若松郁斗わかまついくとだけど。」

「冷たいのね、人間という物は。本当に、物なのね……やつぱり、不思議少女か。前の時みたいに服、真っ黒だし。あれか、

電波？髪結い＝電波。よし、決定だな。

「おい！電波！！邪魔になつてるぞ。」

「で、電波つて何のことよ！」

「……邪魔になつてるぞ！」

「じゃ、じゃま？」

そうだ、電波入つてる髪結いだがが立つてるのは校門の真ん中。まあ、いつも車もあんまり通らないからべつにいいのだが……今日は偶然、通つた。髪結いの後ろで一生懸命クラクションを鳴らしている。パーパーうるさい。運転手をよく見ると……げつ生活指導の岩村じやねーか。

やべえ、電波無視して行くか。

俺は、まっすぐ昇降口を目指して足を動かした。もちろん、走つて。

「ちょ！？アリス！？！待ちなさいよ……！」

電波少女髪結いの声が遠く聞こえる。よし、巻けたか！！

俺が、一人で納得していると、後ろから例の車が追いついてきた。さつきまで、通せんぼを食らつていたらしい。岩村、ご愁傷様。と、あれ？先生の車、俺の隣で停まつたぜ、おい。マジかい。

「郁斗君よね？五日ぶりの『ご登校、ご苦労様。』さつきの子……知り合いつ？」

「あ、はい。おはよございます。いえ、知りませんが……」

「じゃあ、いいわ。ありがとうございます。後で職員室ね？」

「は、はい。」

岩村はいやみ交じりにそういうて学校へ入つていった。
何なんだか・・・。

学校登校と電波な髪結い（後書き）

だつはあ

なんか中途半端ですがどう^ ^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7619c/>

髪結い～死神の物語～

2010年10月9日19時45分発行